

## 【コンペティション I 総評】

第30回となるコンペティションは、153組から選ばれた8組（日本4組、中国2組、台湾、韓国）が上演を行い、制限時間20分内にそれぞれ個性的なスタイルを示した。

なかでも小林萌『ens』を高く評価したい。抑制したムーヴメントの流れは舞台に普遍的な時空を生み、一見すると静かな身体は、命の生々しさと有限性が絶えず拮抗する劇的な場となる。微かな髪揺れすら振付に昇華させた詩的な創造性が、受賞後のフランス滞在でより深まるのを期待している。

審査員賞のキム・ナイとチョ・ヒョンドのデュオ『Nonfiction』は、コミュニケーションを動機づける感情と絶えまない感覚の交流を高い技術で澁みなく綴り、物語を立ち上げた。ファン・イェンリンとスウエン・メンヤオのデュオ『Flashbulb Memory』も、装飾を排し緊密に構築したムーヴメントが常套を裏切り、スリリングだ。箱を効果的に使った振付が寓意に満ちたチュアン・ポーシアン『Remainder』、ストリート系のスピード感ある動きで主題をポリフォニックに語った asamicro『Wake up』も賞を得た。他には、基本を押さえた武田摩耶『LINES』に将来性を感じた。

岡見さえ（舞踊評論家、共立女子大学文芸学部准教授）

今年初めて審査員となり、観客とは異なる観点からヨコハマダンスコレクションを鑑賞する機会に恵まれた。全8組のファイナリストは、日本の4組、中国からの2組に加えて、韓国と台湾からと、シンプルに肉体の動きを前面に押し出す作品から、複雑な象徴的オブジェや照明の効果を用いた作品まで、東アジアからそれぞれに異なる特徴を持つ振付家のダンスを楽しめたことに感謝したい。

一方で、現代美術の専門家として、私の立場からは、舞台上のセットや小道具、衣装、照明といった視覚的な装置は、ダンサーの身体が持つ象徴的意味を強化する場合もあるが、本来振付家が意図する以上に過剰な意味を生じさせる場合もあり、とりわけ本コンペティションのように欧米を含めた国際的な観客が想定される場においては、アジア的な身体の表象と共にどのような意味を持つのか、慎重にその効果を検討して欲しいという思いを強く抱いた。こうした総合芸術としての作品という観点からも、キム・ナイとチョ・ヒョンドの『Nonfiction』は、身体能力の高いダンサーたちによるシンプルかつ力強い振付で、審査員賞にふさわしい作品であった。

木村絵理子（弘前れんが倉庫美術館 館長）

韓国・中国のダンサーたちのフィジカル、表現力の高さを目の当たりにした。

キム・ナイ、チョ・ヒョンドの『Nonfiction』。2人のムーブメントは観るものの好奇心を惹きつけ続けた。暗転を挟んだ後にあった主題を印象づける短いエピローグについて、説明的な場面を添えずともよかったのではないかという意見が多かったが、新作を期待するに十分な快作であった。

ファン・イェンリンとスゥエン・メンヤオの『Flashbulb Memory』は光と闇を活用し、魅惑の軟体を余すところなく見せた。その特殊な身体性は人体の表裏をひっくり返すような、超現実的に世界を見つめる凄みがあった。イメージを具現化出来るその実力で、次なる世界を生み出して欲しい。

小林萌の『ens』は極めて限られた檻の中に自らを閉じ込めた。実演を大いに期待していたが、映像を多用したことで私は焦点を見失ってしまった。ダイナミックな映像によって空間は埋めることが出来たのかもしれないが、肝心のムーブメントへの視点が散逸してしまっただけではないか。だがその発想力と探究心は今後も期待が膨らむ。

素直に踊り切った asamicro の評価は割れた。劇場空間を制圧できなかったことが大きいと思う。

改めて各技術セクションと響き合うことの大切さを知る。共演者は勿論、ビジョンを豊かにシェアできる力も獲得して行って欲しい。

映像審査で選ばれなかった作品にも煌めくアイデアはあった。一つ一つをここで紹介することは出来ないが、またぜひ果敢にチャレンジして欲しい。

長塚圭史（劇作家、演出家、俳優、KAAT 神奈川芸術劇場芸術監督）

自らの身体を深く探究し、舞台上に強度ある身体を生み出した作品ばかり、ヨコハマダンスコレクション 30 回目にふさわしい力作ぞろいだった。

若手振付家のための在日フランス大使館・ダンスリフレクションズ by ヴァンクリーフ&アーペル賞の小林萌『ens』は、YDC2021 にコンペ II で見せたデュオから今回の挑戦的なソロへと、その大きな飛躍に驚かされた。一体感を失ってバラバラに切断された身体を舞台に幻視させる力強い作品。審査員賞を受賞した韓国のキム・ナイ & チョ・ヒョンド『Nonfiction』は、とても魅力的な男女デュエットだった。彼らの中に横たわる真実を探り合い、つかず離れずに踊る 2 人から一瞬たりとも目を離せなかった。2 人とも優れたダンサーだが、とくにキム・ナイの強靱な動きは圧倒的。ベストダンサー賞に選ばれた中国のファン・イェンリン & スゥエン・メンヤオ『Flashbulb Memory』は、一篇のホラー映画を思わせる不気味な世界。暗闇のなかで異様な動きを見せる 2 人は、異次元の裂け目から姿を現した諸星大二郎の漫画の妖怪のように見えた。振付の 2 人のうち 1 人が出演できなくなったため急遽代役を立てたとは信じら

れないほど、息のあったパフォーマンスだった。3組とも彼らの次の作品を観たいと強く思わせる。

浜野文雄（新書館「ダンスマガジン」編集委員）

久しぶりに観たダンコレは、映像審査で見た他の方達も含めてダンサーの技術が格段に進化している事にまず驚きました。しかし作品のコンセプトや演出、選曲を含む世界観には今一つ新鮮さを感じさせないものが多かった印象です。必ずしも新しさが必要ではないとは思いますが、ダンスの概念を揺らがせるような切り口についてももっと探る余地があってもいいのかな、とは思いました。最終審査では、総合的な完成度よりもまずは身体そのものが説明を介さずに語るべく言語を発しているか、というのを評価の大切な点としました。

つまり「それはダンスによってしか成し得ない事なのか」ということにも繋がるかと。それにはコンセプトを表現するだけでは足りなくて、そんなんあったっけ？と忘れさせる位の身体の必然性と自発性が問われるのだと思います。

そういう意味において Kim Na Eui, Jo Hyun Do さんの作品は、動きそのものが新たな身体言語として立ち上がってくる説得力があり、どういう原理で動いているのか計り知れない独自のスタイルを持っているという点において、今見たいと思わせる作品でした。見ている自分が解けていき、今そこにあるダンスに吸い込まれていくという、ダンスを見る醍醐味を味わわせてくれた。

Zhang Yutong さんは被写体としての自分という視点から作っていたのが興味深く、Huang Yanlin, Sun Mengyao さんは構成、技術、照明、音の全要素のバランスが見事な作品でした。小林さんの制限されたフレームの中でこそその秘めやかな息遣い、asamicro さんのコツコツ掘り出していくようなダンスにも惹き込まれました。高橋さんは一つのアイデアを繊細に作り込んでいて、湿度を感じさせるダンサーもよく体現していたと思う。武田さんは手段そのものをダンスに転化しようとする試みが異質なアプローチで良かった。CHUANG Po-Hsiang さんの作品は箱を被ることでイメージの遊びが生まれ、動きそのものを観る悦びがありました。

皆さんそれぞれに自身（ダンサー）の特性を活かした振付が素晴らしかった、けども、美術や映像や音楽の使い方に関しては少し勿体なさを感じるころもあったので、振付と同じくらい熟考して欲しいと感じました。

最後のついで。

昨今、振付家の仕事は作品を発表するだけに留まらず、幅広い解釈において多岐に渡る需要が出てきたと感じます。社会の色々な場所へダンスの価値を蒔いていく、そ

の道を開拓することもそれぞれの活動の糧になると思うので、どうかコンペや劇場に限らずにガムガムと踊り出して行って下さい。

康本雅子（ダンサー、振付家）